
蒼き龍人と紅の花嫁

萬權さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き龍人と紅の花嫁

【Nコード】

N8419L

【作者名】

萬權さくら

【あらすじ】

出逢いから二人の道は違っていた。お前を憎み滅する為に俺は存在している……。惹かれあってはいけない相手なのに、あの日の瞳が忘れられない。想いを断ち切れないまま、二人は再会を果たす。

仇同士のラブストーリーです。

始まりの章 1

始まりの章 1

タン、タン、タン、タン……

小さな素足が冷たい床を蹴り、少しばかりの音を刻んでゆく。つまづきそうになるのか時折リズムが狂うこともあったが、廊下をひた走る足音は止む気配なく続いた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

半円アーチの丸い天井が続く回廊に荒く吐き出された息が、響きを残し流れてゆく。足元を照らす光は、壁や大柱にある明り取りだけなので心もとなかったが、そうも言っていられないとばかりに少年は幾度も後を気にし、振り返りながら走ってゆく。

だんだん部屋数がすくなくなってきたなと思っていた矢先だった。突き当たった廊下を曲がると、すぐ先に大きな扉が現れた。子供ではあけるのに手にあまる立派な扉だ。

（あの扉は……）

不意に少年の顔がしかめ顰められた。

あつてはならぬことを想像して。

迷っている暇はなかった。

道はこの扉の前で途切れている。

彼は重厚な取っ手を意外にも手馴れた様子で「えいっ」と気合のうちに引き下げ、小さな体を扉に押し付けた。

ギギッという音とともに開かれる奥部屋。

「うっ…」

突然に沸き起こった光の洪水が、一瞬だけ視界を奪う。

暗い所から明るい場所へと転進させられた少年は、光の元が何であるのか理解するのに少しの間を必要とせねばならなかった。

落ち着いてきた瞳に映し出されたものは、高い天井と磨き上げられた大理石の床。黄金と真紅で揃えられた豪華な装飾品の数々。仄かに品の良い香が焚かれており、壁には季節の花である桜の木が見事な枝ぶりのままに持ち込まれ飾り立て掛けられてあった。

少年は莊嚴に整えられた部屋を見回しながら、感嘆とともに安堵の息を漏らした。

扉の感じが似ていたので、あちらこちらと逃げ回っているうちに、自分の部屋に舞い戻ってしまったのかと、肝を冷やしていたからである。

確かに広さや間取りは似ているようだが、青を基調としたモノトーンに整えられている彼の部屋とは色調が正反対と言えるほど違っていた。

少しだけ憂いの晴れた彼は、臆することなく美しい空間の奥へと歩みを進める。

窓枠と同じ龍のレリーフで縁どられた仕切りか花瓶を乗せたキャビネットの横に見えた。

自分の部屋と同じ造りなら、そこが寝室の入口になっている筈である。

（誰の部屋なんだろう……）

今さっきまで必死に逃げていたというのに、子供らしい好奇心が初心を薄れさせてゆく。

壁を潜ると奥の間は予想通りに寝室であった。

中央には二重三重の薄いヴェールで囲われた大きな天蓋ベッドが、部屋の主であるかのように鎮座している。

シャララ…と、不意に滑るような軽い衣擦れの音がした。

「？」

誘われるように、ゆっくりと彼は寝台へと歩み寄る。

すると、ヴェールの中からヒュッと小さく息を呑む音が聞こえてきた。

一瞬、逃げなければという想いにも駆られたが、何故だか好奇心に勝てなかった。

「誰か居るのか…？」

気付いた時には誰^{すいか}何を問うていた。

始まりの章 2

始まりの章 2

それは部屋の主にとっても同じ疑問であったようだ。

「だれ…？」

中からか細い声で同じ問いが返される。

「……」

ちよつと考えるように眉間に皺を作った侵入者は、とりあえず質問を無視して目の前のヴェールを捲^{めく}ってみることにした。

布の端を掴んだかと思うと勢いよく舞い上げ自分の身を内側に滑り込ませる。

「！」

部屋の主は驚きのあまり声も出せないようだった。

生まれてこのかた自分の記憶を辿る限り、このように横暴な態度を他人からとられたことが無かったのだろう。

ベッドの上から侵入者を見極めようと身を乗り出していたため、顔をつき合わす形で対面してしまい、動きは人形の如く固^こまってしまったていた。

驚いたのは少年も同じであった。

自分から侵入しておきながら、次の行動も起こせずに固まっている。息をするのも忘れているかのように微動だにしない。

互いに見つめ合ったまま。目を奪われ合ったまま。

まるで世界の時間が止まってしまったかに思える空間が出来上がっていた。

（女……？）

歳の頃は自分と同じであろうか。

質の良さそうな薄桜色の衣に方から足先までを柔らかく包まれた姿は、少女でありながらもどこか中世的な、いわば聖女独特の無機

質さを醸し出しており、幼いながらも目を見張る美しさだった。

面立ちもさることながら、それ以上に美しかったのは、腰まで豊かに流れた紅の髪とルビー色の瞳。

（綺麗だ…）

少年は気が付くと、紅瞳の中に自分の姿が写るのを、不思議な気持ちで見入ってしまった。

最初に沈黙を破ったのは、部屋の主のほうであった。

「お前…」

愛らしい唇が開き音を紡ぎ、少年の白い頬に華奢な指が伸ばされる。

「お前…きれい…」

薄桃色の唇から零れ落ちたのは悲鳴でも苦情でもなく賛美だった。黒曜石を思わせる綺麗な瞳。短いけれど少年らしく揃えられた艶やかな黒髪。

確かにこれならば、咎めるよりも触れてみたくなるのが道理というもの。

子供目に見ても非常に整った面差。

惹かれるまま触れた頬は、陶器のごとく冷たいかと思えば意外にも指先に温もりを伝えてきた。

身につけている服や装飾からいって、神官か貴族の子供であろう。立ち姿にもどことなく気品が伺えた。

「……………」

互いに言葉も忘れたまま見つめ合う時がまた訪れた。

瞳を伏せてしまったら、夢となって消えてしまいそうな儚さを感じていたのかもしれない。

両頬に伸ばされた小さな手には、いつの間には少年の手が重ねられており、さながら幼い恋人同士のようにであった。

どれほど経ったであろうか。

ようやく少年が何かを言おうと口を開きかけた時、かけられた魔法が解けたが如く静寂は破られた。

ガタンと響く大きな物音と共に足音が近づいてくる。

「！」

細く開けられたままだった扉が勢いよく開け放たれたかと思うと、数人の男たちが物々しい出で立ちで部屋へと乗り込んで来たのだ。

「くそっ……」

少年は本来の立場を思いだした。

弾かれたように体を反転させヴェールを抜け出す。

しかし既に状況は厳しいものだった。

始まりの章 3

始まりの章 3

たちまちのうちに小柄な少年の体は、大人二人に両脇から押さえ込まれ、呆気なく追跡者の目前へと引きずり出された。

「放せつ…！」

「このような時間に、他所様のお部屋を訪ねるものではありませんよ」

囚われた少年の前に男がゆっくりと歩み出た。

この地でよく見られる肩から下をすっぽり覆ったティエンジェと呼ばれる衣に、湘綉シアンシウにて龍神を縫い取ったサツシユ。頭から肩へと絹のトーまとがを纏っている。

神官の出で立ちだ。

「随分と梃子ていす摺らせて下さいましたね、和泉様」
ねっとりとした声には、明らかな苛立ちが含まれている。

丁寧な言葉遣いだが、子供の悪戯いたづらを嗜めるにとしては随分と殺気も露だ。

部屋の主は、思わず息を呑み潜める。

捕らえられた少年の怒りに青ざめた顔から、事態が何やら緊迫していることを感じずには居られなかった。

「お前こそ何の真似だ！」

幼くも美しい顔は、怒りと恐怖に歪みながらも、その黒い瞳だけは屈服の色なく相手を射抜き、膝を付くことを拒んでいた。

「父や母を陥れ、次はこの俺か！」

「お独りでは寂しいでしょうから、お父上たちの所へ送って差し上げるのですよ」

男の殺意はを孕んだ言葉に少年の身体が一瞬だけ硬直する。

少年の両親はもうこの世に居ない。つい夕刻まで彼と一緒に幸せな時間を過ごしていたというのに。

それというのも、ここにいる男たちが有らぬ罪状を並べ立てて地下牢へと連れ去り、何の審議も為さないまま惨殺してしまったのだ。「このような…っ」

事態の圧迫感に少年の咽が呻くような言葉を零す。

「このような非道…、御神の逆鱗《逆鱗》にふれないとでも思っているのか！」

湧き上がる怒りと恐怖に、陶器のような白い頬はますます色を失っていく。

「口をお慎みなさい！」

無骨な大人の手が細い顎を力任せに上げさせる。

少年の言葉など少しも気に留めていない、蛇の如き陰湿な眼が彼を舐めるように見下す。

「ここを何処だと思いです」

勝ち誇ったような忌々《いまいま》しい喋り方。

「御神の采女にお上がりなさいます巫女姫様の御寢所ですぞ」

「！」

和泉と呼ばれた少年は弾かれたように寝台の上に視線をやる。

ヴェールの中では先ほどの美しい少女が、こちらの様子を何事かと緊張した面持ちで窺っていた。

「姫は、まだ何も知りませんよ。御両親の罪状の事を…」

勿体ぶった物言いに、少年は鋭い視線を男に返す。

「大人しくなさい。」

姫に知られたのでは、貴方も一族も肩身が狭くなりましょう？」

耳元で囁かれた言葉に、両親にかけられた罪状が改めて脳裏に浮かぶ。

御神に仕える炎一族の宗家当主「紅玉」を毒殺。

それが和泉の両親が犯した罪だと男たちは云う。

ここに居る巫女姫の親を殺したのだと……。

（嘘だ！ 信じない！）

父と母に振り下ろされた剣の閃きと鮮烈な赤を思い出し、和泉は張り詰めていた糸が切れたように力無く膝を付く。

『逃げなさい！』

父親が彼に投げかけた最後の短い叫びだけが今も鼓膜の奥で木霊している。

聡明で立派だった父が天意に背く大罪を犯すなど、例え身体を切り刻まれる脅しを受けたとしても起こす筈がない。

和泉は固く信じている。

だが両親を救う手立てを持たなかった自分の無力さに、まだ6歳の幼い彼は酷く傷ついていた。

「さあ和泉様、別室に参りましょうか」

静かに崩れ落ちてしまった少年の姿に満足したのか、男は唇に皮肉を含んだ笑みを浮かべる。

「それでは巫女姫様、突然の入室でお騒がせした事、お許し下さいませ」

事の顛末をジツと見つめていた部屋の主へと向き直った男は、殊更に恭しく一礼を済ませると従事に少年を引き立てさせ寢所を退出していく。

「……………」

この物々しい捕り物は一体なんだったのか。

父親の死を未だ知らない巫女姫は、突然に起きた騒動に取り残されたような疎外感を味わわれていた。

普段から異性の者は勿論のこと、専用の侍従意外の者とは直に言葉を交わすことも儘為らぬ身である。

会った事もない神官に声をかけ引き留めるなどという事は考えも及ばない彼女は、ただ黙って一行の後ろ姿を見送った。

本当は、小さな台風の目であった少年の事がとても気がかりではあったけれど。

巫女姫の元に悲しい知らせが運ばれて来たのは、更に十日の時間を費やしてからであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8419/>

蒼き龍人と紅の花嫁

2010年10月14日19時55分発行